

米子工業高等専門学校		開講年度	令和05年度 (2023年度)		授業科目	構造力学Ⅲ											
科目基礎情報																	
科目番号		0057		科目区分		専門 / 必修											
授業形態		講義		単位の種別と単位数		学修単位: 2											
開設学科		建築学科		対象学年		4											
開設期		前期		週時間数		2											
教科書/教材		林貞夫「建築構造力学」共立出版															
担当教員		北農 幸生															
到達目標																	
不静定骨組構造物の解法の学修にあたって以下の目標を設定する。 (1) 梁・柱部材の変形の計算ができる。 (2) 1次の不静定構造物を解く事ができる。 (3) 力の平衡条件、変形の適合条件、力と変形の関係（構成則）を理解できる。 (4) 高次の不静定骨組構造物の解法が理解できる。																	
ループリック																	
		理想的な到達レベルの目安		標準的な到達レベルの目安		未到達レベルの目安											
評価項目1		梁・柱部材の変形の計算が適切にできる。		梁・柱部材の変形の計算ができる。		梁・柱部材の変形の計算ができない。											
評価項目2		1次の不静定構造物を解く事が適切にできる。		1次の不静定構造物を解く事ができる。		1次の不静定構造物を解く事ができない。											
評価項目3		力の平衡条件、変形の適合条件、力と変形の関係（構成則）を適切に理解している。		力の平衡条件、変形の適合条件、力と変形の関係（構成則）を理解している。		力の平衡条件、変形の適合条件、力と変形の関係（構成則）を理解してない。											
評価項目4		高次の不静定骨組構造物の解法を適切に理解している。		高次の不静定骨組構造物の解法を適理解している。		高次の不静定骨組構造物の解法を理解していない。											
学科の到達目標項目との関係																	
学習・教育到達度目標 A-3																	
教育方法等																	
概要		3年生で学習した構造力学I,IIを基礎として、変形の計算手法を学習すると共に、実際の建築構造物の構造計画および構造設計に不可欠な不静定骨組構造物の解法を学習する。															
授業の進め方・方法		構造力学IIIは、構造力学I,IIで学修した内容を基礎として、それを発展させて行く内容となるので、構造力学I,IIの内容が理解されていることを前提とし、講義を実施する。構造力学I,IIの内容が充分でない場合は復習しておくこと。 質問はオフィスアワー（月・木曜の14:30～17:00）に研究室で受け付ける。 また、次のような自学自習を60時間以上行うこと。 ・授業内容を理解するため、予め教科書等で予習する。・授業内容の理解を深めるため、復習する。 ・授業内容を参考に、演習課題およびレポート作成に取り組む。															
注意点		成績評価は定期試験70%、演習30%で行う。 中間試験については、全員を対象に再試験を実施し、中間試験と再試験の平均を中間試験素点とする。 期末試験については、評価点が40点以上60点未満の学生を対象に再試験を実施し、所定の点数に達した場合は評価点を60点とする。 宿題などは5点満点で評価する。提出遅れは減点して採点を行う。他人のものを丸写ししたり、書き殴ってあるものは採点の対象にしない。															
授業の属性・履修上の区分																	
☒ アクティブラーニング		☐ ICT 利用		☒ 遠隔授業対応		☐ 実務経験のある教員による授業											
授業計画																	
		週	授業内容		週ごとの到達目標												
前期	1stQ	1週	構造力学Ⅰの復習（梁のM図等）		梁に生じる曲げモーメントが計算できる。												
		2週	弾性曲線式・モールの定理 演習（1）		梁に生												

評価割合							
	試験	発表	相互評価	態度	ポートフォリオ	その他	合計
総合評価割合	70	0	0	0	0	30	100
基礎的能力	0	0	0	0	0	0	0
専門的能力	70	0	0	0	0	30	100
分野横断的能力	0	0	0	0	0	0	0